

# 大学生における進学動機・自己意識・社会意識

## ——専攻分野間の比較——

後藤 宗理

### I 問題と目的

大学が大衆化時代を迎えて、従来の大学教育の概念では捉えきれない状況が出てきている。しかし、現状は個々の大学によって大きく異なっており、それぞれの大学の学生の能力、興味、関心などに左右されることが多い。一方、青年心理学の立場から考えれば、学生たちは所属大学などとは無関係に青年期特有の問題を抱えていることが予想される。今回、筆者が担当しているクラスを中心に、大学生の生活と意識に関する調査を行なったので、分析結果にもとづいて現代の大学生の意識の特徴を考察することにする。

青年期に入ると自分の生き方や価値観について検討を加え、将来の職業についての選択を行なうようになる。しかし、昨今の日本の社会状況を考えると、大学を出ても就職が決まるわけではなく、また定職につかないでフリーターというかたちで働く青年たちも多い（後藤・大野木、2003）。このような青年たちの行き方の多様性が何に起因しているのかを明らかにするために、本研究では、大学生生活の入口、学生生活の過程、そして職業選択など出口、に関わる3つの部分に分け、それらがどのように関わっているのかを明らかにしようとする。特に、今回は教養教育科目の受講生を対象とした調査が主体であったので、入口と過程を中心に計画した。

具体的には、若林ほか（1983）の枠組みを参考にして、大学教育の入口部分での大学進学動機、大学生生活で重要な条件、大学で身につけたい能力、過程部分での学生生活に対する意欲、職業準備性など、出口部分での進路希望、そして学生生活全体に関わるアイデンティティの特徴、私生活主義、成人度などを要因として取り上げた。

以下ではまず、これらの要因について概観する。

大学進学動機については、立命館大学教育科学研究所（1997）の研究がある。この研究では主に資格免許、知識、教養、人間的成長という3つの側面から検討している。

過程部分では学生に共通した問題として学習意欲の問題を取り上げる。大学進学動機とも関係するが、大学に入ることが目的となっている学生もかなり目立っているという指摘がなされているが、それは裏返していえば、入学後急速に学習意欲をなくす学生の存在を無視できない状況が生まれていることを予想させる。このような学習意欲の低下は、青年期の「自我同一性の確立対 拡散」というEriksonの課題とも大いに関係する。また、この自我同一性の確立が青年期のさまざまな役割の試行、特に職業に関わる役割試行と関係していることから、青年の職業意識についての検討を行うことは重要である。職業意識については、さまざまな角度から検討されてい

るが、たとえば、若林ほか（1983）は、短大生の中で保育系や看護系のような資格志向の学生と教養系学科の学生との比較を行ってきた。現在は当時とは社会状況が大きく変化しているが、四年制大学の中での資格志向学生といわゆる教養志向学生との比較は今日の大学生を取り巻く状況を考えれば、依然として重要な問題である。

今日の青年にとって職業に関する問題は、就職できないということだけでなく、就職してもすぐにやめたくなるような状況、そしてフリーターに代表される定職につきたがらない青年たちの存在に見ることができる。これらの状況は単に社会に原因があるとして片付けてしまうのではなく、青年自身のものの考え方の変化として捕らえることが必要であろう。久世・宮沢ほか（1987）と久世・後藤ほか（1987）は、1970年代に青年期の社会的態度の研究を通して、青年の意識の中に私生活主義と呼ばれる新しい変化が生じていることを指摘している。そして従来の、保守的、革新的、大衆社会的態度とは異なる、新しい切り口を提案した。私生活主義とは、後藤（2000）によれば、「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」と「自分の感覚や実感の重視」の2つの視点から捉えることができる。この2つの視点と規範意識とを組み合わせ、久世・宮沢ほか（1987）は質問紙を作成している。

これまでみてきた側面のうち、「大学進学動機」「大学生活に重要な条件」「職業準備性」は大学あるいは専攻による違いを見出すことができると思われる。

一方、「身につけたい能力」「学生生活に対する意欲」「アイデンティティの特徴」は、青年期特有の問題を取り扱っており、大学あるいは学部による違いは明確ではなく、むしろ学年による違いが見出されることが予想される。

今回の研究では、N公立大学のデータを中心に分析するが、対照群としてN私立大学生から得たデータも用いた。

## II 方法

1. 被調査者：N公立大学の教養教育科目「心理学1」の受講生、人文社会学部人間科学科2年生、3年生、4年生、看護学部2年生、3年生、4年生、ならびにN私立大学人文学部を中心とした「心理教育特殊講義」受講生である。内訳は、表1に示したとおりである。
2. 調査時期：2003年5月下旬から6月上旬。主に、講義時の一斉実施とし、講義時間の終わりに回収した。
3. 質問紙：
  - 1) フェイスシート項目：学年、性別、入学1年前の状況、入学に際しての志望順位
  - 2) 大学進学動機：立命館大学教育科学研究所（1997）で用いられたものを利用した。すなわち、大学へ進学した動機について、「専門的知識や技術を学ぶため」「一般的知識や技能を学ぶため」「資格や免許を取得できるから」「就職に有利だから」「自分自身をみつめ、理解することができそうだから」「のんびり自由にすごしたいから」「サークルやクラブで

活動できるから」「友だちをつくるため」の8項目について「非常に当てはまる」「少し当てはまる」「どちらともいえない」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」の5段階で評定を求めた。得点の高いほど進学動機として当てはまるとした。

表1 回答者の内訳

大学	N公立大			N私立大
グループ	教養1-2年	人間2-4年	看護2-4年	人文2-4年
人数	166	92	143	68
%	35.4	19.6	30.5	14.5
学年	1年	2年	3年	4年
人数	158	152	103	56
%	33.7	32.4	22.0	11.9
性別	男子	女子		
人数	98	371		
%	20.9	79.1		

- 3) 大学生生活に重要な条件：若林ほか（1983）が職業に求める条件について作成した項目を参考にして、本研究のために新たに24項目作成した。具体的項目は表2に示したとおりである。各項目について「非常に重要である」「かなり重要である」「どちらともいえない」「あまり重要でない」「まったく重要でない」の5段階で評定を求めた。得点の高いほどその項目が重要であると考えられた。
- 4) 大学生生活を通じて身につけたい能力：立命館大学教育科学研究所（1997）の研究で用いられた項目をそのまま用いた。具体的には、独習的学習力、集団的学習力などをあらかず10項目について「非常に当てはまる」「少し当てはまる」「どちらともいえない」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」の5段階で評定を求めた。得点の高いほどその能力を身につけたいと思っていると考えられた。
- 5) 学習意欲の低下に関する尺度：下山（1995）によって作成された15項目からなる学習意欲低下尺度を用いた。各項目について「非常に当てはまる」「少し当てはまる」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」の4段階で評定させた。得点が高いほど意欲低下の傾向が強い。
- 6) アイデンティティ尺度：下山（1992）によって作成された20項目からなる尺度を用いた。各項目について「非常に当てはまる」「少し当てはまる」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」の4段階で評定させた。得点が高いほどアイデンティティの確立および基礎が確立していると考えられた。

- 7) 職業レディネス尺度：若林ほか（1983）が作成した30項目からなる尺度を用いた。各項目について「非常に当てはまる」「少し当てはまる」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」の4段階で評定させた。得点が高いほど職業レディネスの状態にあることを示している。
- 8) 私生活主義尺度：久世・宮沢ほか（1987）で作成された私生活主義と規範意識をたずねる48項目からなる尺度を用いた。各項目について「非常に賛成」「賛成」「どちらともいえない」「反対」「非常に反対」の5段階で評定させた。得点が高いほど項目に対して賛成の程度が強いと考えられた。
- 9) 成人度：津留（1968）が作成した成人特性をたずねる45項目からなる尺度を用いた。各項目について当てはまるかどうかを「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の3段階で評定させた。先行研究にならって、3つの選択肢に1、0、-1の数値を当てた。値が高いほどその項目について当てはまっている、つまり大人に近いと判断していることになる。
- 10) 卒業後の進路希望：「就職するつもりである」「大学院・専門学校に進学するつもりである」「フリーターになるつもりである」「仕事には就かないつもりである」「きめていない」「わからない」の6つの選択肢の中から1つ選ばせた。

### Ⅲ 結果

#### 1. 因子分析の結果

本研究のために新たに作成した項目および尺度構成を改めて行ったものについて因子分析の結果を示すことにする。

##### 1) 大学生生活に重要な条件

本研究のために新たに作成した24項目について因子分析（主因子法、バリマックス回転）をおこない、4因子を抽出した。その結果が表2である。第1因子は「ゼミのみんなから受け入れられること」「先生とのよい人間関係」「家庭的なゼミの雰囲気」「同級生とのよい人間関係」など人間関係に関する項目での負荷量が高いので、「人間関係」の因子と命名した。第2因子は「自分の人間的成長にとって意味のある機会が多いこと」「課題をつうじて勉強し成長する機会が多いこと」「自分の力で何事か成しとげる機会が多いこと」「知的興奮を味わえる機会の多いこと」など成長の機会に関する項目での負荷量が高いので、「成長機会」の因子と命名した。第3因子は「困難な課題に挑戦する機会が多いこと」「与えられる課題の内容が複雑で変化に富むこと」「自分の能力がためされる機会が多いこと」「リーダーシップを発揮する機会が多いこと」など困難な課題に挑戦する機会に関する項目での負荷量が高く、「挑戦」の因子と命名した。第4因子は「休講や授業の空き時間が多いこと」「あまり努力しなくても単位が取れること」「アルバイトに多くの時間を割くことができること」「通学が便利なこと」などの項目での負荷量が高いことから、

表2 大学生活に重要な条件についての因子分析結果 (N=469)

項目	I	II	III	IV	共通性
19 ゼミのみんなから受け入れられること	.70	.19	.01	.02	.52
5 先生とのよい人間関係	.65	.19	.12	-.09	.47
12 家庭的なゼミの雰囲気	.60	.25	.04	.12	.44
7 同級生とのよい人間関係	.50	-.01	-.15	-.07	.27
13 クラブ活動などをつうじて社会に役立つこと	.45	.11	.27	.03	.28
4 自分に対する仲間や先生の期待	.44	-.02	.25	.04	.26
8 大学・学部の世間での評判がよいこと	.42	-.06	.11	.24	.25
23 自分的人間的成長にとって意味のある機会が多いこと	.09	.64	.08	-.05	.43
17 課題をつうじて勉強し成長する機会が多いこと	.21	.63	.28	-.20	.56
18 自分の力で何事か成しとげる機会が多いこと	.18	.60	.36	-.22	.57
22 知的興奮を味わえる機会の多いこと	-.07	.53	.16	.07	.31
11 学習環境が快適であること	.29	.43	.05	.15	.29
16 テーマを自由に設定できる機会が多いこと	.20	.31	.27	-.09	.21
9 困難な課題に挑戦する機会が多いこと	.05	.23	.75	-.12	.62
2 与えられる課題の内容が複雑で変化に富むこと	-.06	.20	.52	-.11	.33
14 自分の能力がためされる機会が多いこと	.17	.36	.46	-.07	.38
20 リーダーシップを発揮する機会が多いこと	-.36	.03	.44	.04	.32
10 有名な先生の講義が受けられること	.29	.20	.35	.19	.28
6 休講や授業の空き時間が多いこと	.06	-.15	-.18	.62	.44
24 あまり努力しなくても単位が取れること	.11	-.26	-.24	.55	.43
21 アルバイトに多くの時間を割くことができること	.15	-.11	-.03	.52	.30
15 通学が便利なこと	.11	.17	-.01	.44	.24
1 安い授業料 (残余項目)	-.05	.05	.09	.40	.18
3 福利厚生施設が充実していること	.24	.12	.23	.20	.16
2乗和	2.64	2.29	2.00	1.62	7.55
%	11.01	9.52	8.35	6.74	35.62

「楽勝」因子と命名した。

## 2) 大学生活に対する意欲低下尺度

下山(1995)によって作成された15項目について因子分析(主因子法、バリマックス回転)をおこない、3因子を抽出した。その結果が表3である。第1因子は「大学にいるよりも、自分ひとりであるほうがいい」「大学のなかで自分の居場所がないと感じる」「大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である(反転項目)」「大学でいろいろな人と交流がある(反転項目)」など大学生活の意欲低下に関する項目での負荷量が高いので、「大学意欲低下」の因子と命名した。第2因子は「教師に言われなくても自分から進んで勉強する(反転項目)」「勉強で疑問に思ったことはすぐ調べる(反転項目)」「勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう」「授業に出る気がしない」など学習意欲の低下に関する項目での負荷量が高いので、「学習意欲低下」の因子と命名した。第3因子は「朝寝坊などで授業に遅れることが多い」「授業の課題の提出が遅れたり出さなかったりするこ

表3 大学生生活に対する意欲低下の因子分析結果 (N=469)

	I	II	III	共通性
10 大学にいるよりも、自分ひとりであるほうが良い	.72	.02	.12	.53
15 大学のなかで自分の居場所がないと感じる	.69	.04	.18	.51
13 大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である	-.59	.32	-.20	.49
7 大学でいろいろな人と交流がある	-.53	.03	.16	.31
4 学生生活で打ち込むものがない	.51	-.27	.03	.33
2 教師に言われなくても自分から進んで勉強する	-.07	.67	-.15	.48
9 勉強で疑問に思ったことはすぐ調べる	-.09	.54	-.15	.33
6 勉強に関する本を読んでもすぐに飽きてしまう	.14	-.54	.16	.34
1 授業に出る気がしない	.18	-.52	.47	.52
12 必要な単位以外でも、関心のある授業はとるようにしている	.06	.49	.02	.24
14 大学で勉強することで自分の関心を深めている	-.33	.46	-.24	.38
3 朝寝坊などで授業に遅れることが多い	-.05	-.07	.69	.49
11 授業の課題の提出が遅れたり出さなかったりすることがある	.12	-.04	.66	.45
5 何となく授業をさぼることがある	.07	-.19	.61	.42
8 大学からの連絡事項を見落とししてしまうことが多い	.05	-.17	.38	.18
2乗和	2.08	2.00	1.90	5.98
%	13.90	13.33	12.67	39.90

とがある」「何となく授業をさぼることがある」「大学からの連絡事項を見落とししてしまうことが多い」など授業に対する意欲低下に関する項目での負荷量が高く、「授業意欲低下」の因子と命名した。これらの因子を構成している項目は下山（1995）の結果と必ずしも一致していないが、先行研究を参考にして同じ因子名を用いることにした。

### 3) 成人度

成人度を調べる45項目について、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果が表4である。表から明らかのように4因子を抽出した。第1因子は「よく考えてから行動する」「ものごとを軽率に判断することが多い（反転項目）」「ものごとをいろいろな面から考えることができる」「いつも自分の行動の目的を意識している」などの項目での負荷量が高いため、「熟慮」の因子と命名した。第2因子は「人前でやたらにはずかしがる（反転項目）」「初めての人も落ちついて話し合える」「自分の考えを人によく納得させることができる」「細かな理屈にこだわるより妥協する方である」などの項目での負荷量が高いため、「表面的成人」の因子と命名した。第3因子は「興奮しやすい（反転項目）」「気分がよく変わる（反転項目）」「他人の忠告を落ちついてきくことができる」「衝動的に何かしてしまってから後悔することが多い（反転項目）」などの項目での負荷量が高く、「冷静さ」の因子と命名した。第4因子は「人のいうことに動かされやすい（反転項目）」「小説や映画は恋愛物が好きである（反転項目）」「衣服や持ち物の流行を気にする方である（反転項目）」「他人が自分をどうしているかとても気になる（反転項目）」などの項目での負荷量が高いため、「社会的成熟」因子と命名した。

表4 成人度の因子分析結果 (N=469)

項目	I	II	III	IV	共通性
7 よく考えてから行動する	.60	.17	-.07	-.06	.40
9 ものごとを軽率に判断することが多い	-.60	.05	.18	.03	.40
8 ものごとをいろいろな面から考えることができる	.41	-.35	-.10	.09	.31
6 いつも自分の行動の目的を意識している	.39	-.12	.02	-.06	.17
15 一度きめたことでもよく変えることがある	-.36	.23	.13	.23	.26
35 自分の責任に気づかないことがある	-.35	.20	.23	-.02	.22
40 他人の性格をよく知った上で交際する	.31	-.04	-.08	.06	.10
31 人前でやたらにはずかしがる	-.01	.45	.29	.03	.28
37 初めての人も落ちついて話し合える	.07	-.43	-.30	.12	.30
17 自分の考えを人によく納得させることができる	.30	-.41	-.10	.04	.27
18 細かな理屈にこだわるより妥協する方である	-.20	.38	-.10	.18	.22
5 新しい生活を始めるのがおっくうである	-.12	.35	.16	-.05	.16
34 働くときと遊ぶときとを上手に使い分けられる	.27	-.30	-.29	.16	.27
24 興奮しやすい	-.06	-.10	.48	.21	.29
23 気分がよく変わる	-.19	.05	.45	.17	.27
33 他人の忠告を落ちついてきくことができる	.13	-.04	-.45	.04	.22
22 衝動的に何かしてしまってから後悔することが多い	-.23	.07	.40	.35	.33
25 異性のことで気が散りやすい	-.16	-.08	.38	.34	.29
41 それぞれの人に応じた態度をとることができる	.19	-.12	-.33	.20	.20
28 空想にふけることが多い	-.11	.12	.33	.13	.16
38 きらいな人とも仕事の上ならつき合える	.02	-.01	-.33	.08	.11
16 人のいうことに動かされやすい	-.26	.41	.11	.43	.43
26 小説や映画は恋愛物が好きである	.06	.06	-.15	.42	.21
27 衣服や持ち物の流行を気にする方である	-.06	-.04	-.03	.42	.18
39 他人が自分をどういっているかとても気になる	.04	.34	.14	.41	.30
32 自分をいつもよく見せようと努めている	-.03	.10	.16	.40	.19
42 なんでも相談できる人がいないと心細い	.04	.17	.13	.36	.17
43 自分の子どもを一生けんめい育ててみたいと思う (残余項目)	.14	-.10	-.08	.33	.15
11 時間やお金をムダ使いすることがある	-.29	.13	.19	.14	.16
44 ささいなきまりや道徳でも、重んずる方である	.29	.11	.12	.04	.11
13 自分をありのままにみることができる	.29	-.22	-.17	-.07	.16
2 毎日の食事の量はほぼ一定している	.26	-.08	-.16	.03	.10
30 自分の将来にたいした期待はない	-.24	.22	.13	-.13	.14
14 自分にどれだけのことができるかおおよそわかる	.21	-.14	-.14	.05	.09
3 自分の体力はもう峠を過ぎている	-.04	.29	-.04	.14	.11
36 自分一人になっても経済的に生活してゆける自信がある	.06	-.28	-.11	-.01	.09
4 新しい運動技能を習得するのに以前より努力がいる	-.06	.27	.05	.24	.14
19 自分の行動をしばしば反省する	.06	.27	-.03	.19	.11
45 なにごともほどほどにするのが好きである	-.25	.26	-.17	.17	.19
21 少しぐらいの危険はスリルがあってもおもしろい	-.11	-.24	.14	.06	.09
1 とときどきかなり激しい運動をしたくなる	-.05	-.21	.07	.04	.05
12 宗教の話聞くのが好きである	.03	.02	.23	-.03	.06
20 知らないことでも知ったふりをすることが多い	-.09	.12	.26	.28	.17
29 感激したり感動したりすることは、めったにない	-.13	.07	-.04	-.22	.07
10 多少、体裁がわるくても実用的なものを選ぶ	.09	.05	.06	-.15	.04
2乗和	4.44	1.80	1.36	1.11	8.71
%	9.86	4.00	3.03	2.47	19.36

## 2. 尺度の構成

大学進学動機に関する項目は、もともと8項目しかなく、因子分析の結果2因子よりは3因子のほうが適当であるが、第3因子を構成する項目が2項目となったので、今回は尺度構成を断念し、項目ごとに詳しい分析を行うことにした。

アイデンティティ「確立」、アイデンティティ「基礎」は、先行研究どおりの尺度構成をした。そしてそれぞれ $\alpha$ -係数を求めたところ、.825および.811の信頼性係数を得た。職業レディネスは先行研究と同じく21項目で尺度を構成し、.876の信頼性係数を得た。

身につけたい能力に関する尺度は1因子と考えられたので10項目全部で尺度を構成し、.813の信頼性係数を得た。

大学生活に重要な条件についての各尺度の信頼性係数は、「人間関係」が.747、「成長」が.746、「挑戦」が.679、「楽勝」が.649であった。

意欲低下についての各尺度の信頼性係数は、「大学意欲低下」が.746、「学業意欲低下」が.732、「授業意欲低下」が.683であった。

私生活主義と規範意識の各下位尺度の信頼性係数は、「規範意識」が.785、「身近な事象への関心」が.779、「自分の実感や感覚の重視」が.696であった。

成人度の各下位尺度の信頼性係数は、「熟慮」が.649、「表面的成人」が.592、「冷静」が.640、「社会的成熟」が.608であった。

## 3. 調査グループ間の比較

### 1) フェイスシート項目及び卒業後の希望進路

- ① 入学1年前の状況は、被調査者469名のうち364名(77.6%)が高校3年生であり、77名(16.4%)が受験準備中であった。441名が受験準備中にあり、ほかの短大や大学に在籍していたものは全体で18名(3.8%)であった。
- ② 志望順位は、第1希望310名(66.1%)、第2希望110名(23.5%)で第2希望までにほぼ90%を占めている。
- ③ 大学卒業後の希望進路は、348名(74.2%)が就職を、73名(15.6%)が大学院などへの進学を希望している。進路の不明確な学生はほとんどいなかった。

### 2) 下位尺度別平均値

本研究では男女の割合が女性に偏っていたので、性差の検討は行わず、全体の傾向だけを記述することとした。尺度得点をグループ別に示したものが表5-1、1要因分散分析の結果をまとめたものが表5-2である。以下、N公立大の教養の授業グループ(以下「教養」と略す)、同じく人文社会学部人間科学科における心理学の授業グループ(「人間」)、看護学部の授業グループ(「看護」)、N大学人文学部の心理教育特殊講義の授業グループ(「人文」)の4グループ間で比較した結果を記述する。

- ① 大学進学動機については、8項目のうち「一般的知識や技能」を除く7項目において有意な結果を得た。そして、「専門知識や技術」「資格や免許」「就職に有利」の3項目では「看護」の値が最も高く、ほかの3群とくに「教養」との間に平均値の差が見られた。一方、「自分自身を見つめる」「のんびり自由に過ごす」「サークルやクラブ」の3項目では、「看護」の値が最も低くほかの群との間に平均値の差が見られた。すなわち「看護」の目的志向が明確であること、ほかの群ではいわゆるモラトリアム志向が強いことが示唆された。なお、表5-1から明らかなように、3群の中では「教養」が「看護」に近い値をとっている。これは「教養」の中に看護学部の1年生がいる関係であると思われる。

表5-1 尺度得点の比較（実施グループ間の比較）

	全体 (469)	教養 (166)	人間 (92)	看護 (143)	人文 (68)
動機1：専門的知識や技術を学ぶ	4.47	4.39	4.30	4.68	4.47
動機2：一般的知識や技能を学ぶ	3.83	3.87	3.83	3.83	3.74
動機3：資格や免許を取得できる	3.68	3.51	2.68	4.82	3.06
動機4：就職に有利	3.75	3.71	3.24	4.32	3.37
動機5：自分自身をみつめ、理解することができそう	3.39	3.12	3.70	3.31	3.81
動機6：のんびり自由に過ごしたい	3.02	3.19	3.52	2.39	3.24
動機7：サークルやクラブで活動できる	2.99	3.30	3.09	2.63	2.84
動機8：友だちをつくる	3.61	3.78	3.72	3.45	3.40
大学生生活1：人間関係	3.57	3.48	3.75	3.56	3.57
大学生生活2：成長	3.98	3.88	4.14	3.93	4.09
大学生生活3：挑戦	2.92	2.87	3.06	2.91	2.90
大学生生活4：楽勝	3.38	3.46	3.37	3.45	3.03
能力	4.17	4.14	4.24	4.14	4.20
アイデンティティ1：確立	2.65	2.60	2.63	2.68	2.73
アイデンティティ2：拡散	2.34	2.32	2.34	2.37	2.35
意欲低下1：大学意欲低下	2.08	1.96	2.13	2.18	2.14
意欲低下2：学業意欲低下	2.48	2.47	2.38	2.59	2.42
意欲低下3：授業意欲低下	1.88	1.79	1.99	1.73	2.24
職業レディネス	3.09	3.07	2.98	3.24	2.94
社会意識1：規範意識	2.94	2.86	2.96	2.99	2.97
社会意識2：身近な事象への関心	2.80	2.82	2.82	2.78	2.80
社会意識3：自分の感覚や実感の重視	3.96	3.94	4.00	3.95	4.00
成人度1：熟慮	.06	.04	.17	.02	.04
成人度2：表面的成人	-.01	-.02	-.01	.01	-.01
成人度3：冷静	.14	.12	.20	.13	.13
成人度4：社会的成熟	-.33	-.25	-.31	-.42	-.33

- ② 大学生生活に重要な条件についての4尺度のうち、「人間関係」「成長」「楽勝」の3尺度で有意な結果を得た。このうち、「人間関係」、「成長」では、「人間」「人文」が「教養」「看護」より高い値をとっている。また「人間」「人文」で「成長」の値が高いことも「看護」に比べて目的が明確でないこと、それだけに在学中の体験に期待していることが伺える。「楽勝」尺度に関しては、「教養」「人間」「看護」の公立大3群が私大「人文」よりもはるかに高い値をとっている。これは、授業料の安いことと交通の便のよいことの2項目の値が効いているものと思われる。
- ③ 能力、アイデンティティの2尺度、社会意識の3尺度についてはグループ間の有意差は見られなかった。
- ④ 意欲低下の3尺度では、「大学意欲低下」と「学業意欲低下」は「看護」で高く、「教養」や「人間」のほうが値は低かった。「授業意欲低下」は、「人文」「人間」の値が高く「教養」「看護」の値が相対的に低い。これらの結果をまとめてみると「看護」では決められたことをこなすのに精一杯で主体的な態度が育っていないこと、「人文」「人間」は授業に対する意欲が低いこと、が示唆された。
- ⑤ 職業レディネスについては「看護」がほかの3群よりも高い値をとっており、職業に対する構えが明確であることをうかがわせた。
- ⑥ 成人度の4尺度のうち、「社会的成熟」について「看護」に比べて「教養」で相対的に成人度が高いことが示された。

表5-2 1 要因分散分析の結果

	F 値	df	p	多重比較
動機1：専門的知識や技術を学ぶ	4.576	3,464	<.01	看護>教養、人間
動機3：資格や免許を取得できる	66.303	3,465	<.001	看護>教養>人間、人文
動機4：就職に有利	20.765	3,461	<.001	看護>教養>人間、人文
動機5：自分自身をみつめ、理解することができそう	8.645	3,463	<.001	人文、人間>教養、看護
動機6：のんびり自由にすごしたい	20.141	3,464	<.001	人間、人文、教養>看護
動機7：サークルやクラブで活動できる	7.996	3,464	<.001	教養、人間>看護
動機8：友だちをつくる	3.176	3,465	<.05	
大学生生活1：人間関係	3.940	3,464	<.01	人間>教養
大学生生活2：成長	5.600	3,464	<.001	人間、人文>教養、看護
大学生生活4：楽勝	8.636	3,465	<.001	教養、看護、人間>人文
意欲低下1：大学意欲低下	4.132	3,464	<.01	看護>教養
意欲低下2：学業意欲低下	3.535	3,459	<.05	看護>人間
意欲低下3：授業意欲低下	12.185	3,464	<.001	人文>教養、看護； 人間>看護
職業レディネス	10.892	3,456	<.001	看護>人文、人間、教養
成人度4：社会的成熟	3.072	3,459	<.05	教養>看護

## 3) 項目間相関について

## ① 大学進学動機の各項目の相互相関

大学進学動機についての8項目の相互相関（被調査者全体）を示したものが表6である。表から、「専門知識」と「一般知識」「資格免許」の間の相関が高いこと、「のんびり」「サークル活動」「友達作り」の間の相関が高いこと、さらに「就職」と「資格免許」の相関が高いことがわかる。つまり、動機には勉学の側面、人格形成の側面、就職の側面の3つがあることが示された。

表6 大学進学動機の各項目の相互相関（被調査者全体 N=469）

	専門知識・ 技術	一般知識・ 技能	資格・免許 取得	就職に有利	自己理解	のんびり 自由	サークル 活動	友達作り
専門知識・技術								
一般知識・技能	.30***							
資格・免許取得	.34***	.08						
就職に有利	.12*	.11*	.43***					
自己理解	.11*	.28***	-.05	.00				
のんびり自由	-.21***	.07	-.20***	.06	.10*			
サークル活動	-.02	.02	.00	.15***	.05	.42***		
友達作り	.04	.15**	.07	.20***	.12*	.36***	.55***	

(注) 表中\*印は $p < .05$ , \*\*印は $p < .01$ , \*\*\*印は $p < .001$ であることを示す。以下の表においても同様である。

## ② その他の尺度の下位尺度間相関

本研究で構成されたそのほかの尺度の下位尺度間相関を示したものが、表7である。被調査者全体の結果に基づいて見ると、大学生活に重要な条件では、「楽勝」を除く3尺度の間には正の相関が見られるが、「楽勝」との間には弱い正の相関あるいは負の相関が見られ期待している側面の違いをうかがわせた。

表7 それぞれの側面における下位尺度相関

		被調査者全 体 (469)
大学の条件	人間関係 × 成長	.34***
	人間関係 × 挑戦	.38***
	人間関係 × 楽勝	.14**
	成長 × 挑戦	.54***
	成長 × 楽勝	-.15***
	挑戦 × 楽勝	-.11*
アイデンティティ	確立 × 基礎	.41***
意欲低下	大学 × 学業	.31***
	大学 × 授業	.17***
	学業 × 授業	.37***

表7 (つづき)

私生活主義	規範	×	身近事象	-.24***
	規範	×	実感重視	-.06
	身近事象	×	実感重視	.07
成人度	熟慮	×	表面的成人	.40***
	熟慮	×	冷静	.36***
	熟慮	×	社会的成熟	.12*
	表面的	×	冷静	.33***
	表面的	×	社会的成熟	.16***
	冷静	×	社会的成熟	.25***

アイデンティティの下位尺度間相関並びに意欲低下の3つの下位尺度間相関はいずれも正の相関があった。

私生活主義の尺度のうちでは、「規範意識」と「身近な事象への関心」との間に負の相関があり、この2つの尺度は社会に対する関わり方の違いを示していることが示された。

成人度の4つの尺度間相関は、相互に正の相関を得ていた。

### ③ 大学進学動機の各項目と大学生生活に重要な条件尺度との相互相関

大学進学動機と大学生生活に重要な条件との関係を見たものが表8である。「専門的知識」「一般知識」「自己理解」はいずれも「人間関係」「成長」「挑戦」の各尺度と正の相関、「楽勝」と負の相関があった。大学での勉学を通して何かを得ようとする 것과チャレンジの機会は密接に結び付いており、楽勝的態度とは逆の関係にあるといえる。一方、「資格」「就職」「のんびり」「サークル」「友達作り」は「楽勝」と正の相関にあった。これらの動機は大学における勉学とは直接結び付いていない副次的なものであり、その特徴を示していると思われる。

また、「サークル」「友達作り」は「人間関係」と正の相関があったが、これらの動機は人間関係を基礎としているので、当然の結果ともいえる。

大学進学動機と身につけたい能力との関係については、「専門的知識」「一般的知識」「自己理解」「友達作り」と「能力」との間に正の相関が見られた。

大学進学動機と意欲低下との関係についてみると、「専門的知識」「一般的知識」「自己理解」と3つの意欲低下との間には負の相関が認められる。つまり知識を得ようとしている学生にとっては大学生生活での意欲低下は結び付かない。また「サークル」「友達作り」と「大学意欲低下」は負の相関にあり、サークルや友達作りをしたいものは大学に居場所を確保していることを示している。一方、「就職」と「学業意欲低下」との間、「のんびり」と「授業意欲低下」との間に正の相関が見られた。

表8 大学進学動機と大学生生活下位尺度（被調査者全体 N=469）

	専門知識・ 技術	一般知識・ 技能	資格・免許 取得	就職に有利	自己理解	のんびり 自由	サークル 活動	友達作り
人間関係	.15***	.15**	.06	.14**	.27***	.08	.24***	.36***
成長	.15***	.16***	-.10*	-.08	.38***	-.02	-.00	.01
挑戦	.14**	.16***	.06	.01	.33***	-.04	.09	.02
楽勝	-.12*	-.06	.14**	.22***	-.16***	.18***	.14**	.15***
能力	.25***	.30***	.04	.08	.32***	-.01	.04	.20***
大学意欲	-.14**	-.11*	.00	.02	-.16***	.01	-.29***	-.26***
学業意欲	-.20***	-.20***	.07	.18***	-.32***	.07	.07	.10*
授業意欲	-.22***	-.11*	-.18***	-.08	-.03	.14**	.06	-.01

④ アイデンティティ尺度と意欲低下、職業レディネス、規範意識と私生活主義、ならびに成人度との関係

表9から明らかのように、アイデンティティの2尺度と意欲低下などそれぞれの尺度との相関関係のパターンはほとんど同じであった。すなわち、「確立」「基礎」と「大学意欲低下」「学業意欲低下」との間に負の相関が見られた。アイデンティティの確立及び基礎ができていれば、少なくとも大学や学業に関する意欲低下は見られないことを示している。

「確立」「基礎」の2尺度と職業レディネスとの間には正の相関があった。

社会意識についてみると、「確立」と「身近な事象」との間には負の相関が、「実感重視」との間には有意な正の相関が見られたが、「基礎」と「規範意識」「身近な事象」の間に負の相関が見られた。

成人度の4尺度との間には「確立」「基礎」とも正の相関が見られた。アイデンティティの確立が職業を始め成人度と深い関係にあることを示している。

表9 アイデンティティ尺度と意欲低下

・職業レディネス・社会意識・成人度  
(被調査者全体 N=469)

	被調査者全体(469)	
	確立	基礎
大学意欲低下	-.36***	-.40***
学業意欲低下	-.43***	-.16***
授業意欲低下	-.03	-.03
職業レディネス	.45***	.25***
規範意識	.09	-.09*
身近事象	-.27***	-.22***
実感重視	.34***	.00
熟慮	.40***	.23***
表面的成人	.50***	.59***
冷静さ	.20***	.42***
社会的成熟	.18***	.26***

## 4. 学部間比較

教養グループの1年生のデータに基づいて、学部間の比較を行った。学部別の各尺度得点を示したのが表10-1である。1要因分散分析の結果、進学動機に関する8項目のうち6項目で有意な結果を得た。また、大学生活の尺度では「楽勝」で有意な結果を得た。意欲低下のうち「大学意欲低下」と「学業意欲低下」の2尺度で有意な結果を得た。さらに職業レディネスと成人度のうち「社会的成熟」で有意な結果を得た。これらの結果をまとめたものが表10-2である。多重比較の結果から、知識や技術を学ぶという動機で「看護」「薬」の値が相対的に「人社」「経済」の値よりも高いこと、「自分を見つめる」「のんびり」「友人」という動機での値について「薬」がほかの学部よりも低いこと、などが分かる。さらに大学生活の条件の「楽勝」の値が「経済」が高く「薬」が低いことも示された。

意欲低下尺度の平均値は「薬」が「看護」より高く、意欲低下が強いこと、職業レディネスは「看護」が「人社」「経済」よりも高い。成人度の「社会的成熟」は「薬」が「看護」よりも高い。

これらの結果から、4学部の学生の生き方はかなり異なっていることが分かる。資格・免許志向が強く職業レディネスも高い「看護」、のんびり大学生活を送るのではなく、学問をするために大学に来ている、しかし大学意欲低下、学業意欲低下が相対的に強く社会的には成熟している「薬」、自分を見つめ職業レディネスの低い「人文社会」、のんびり楽勝で大学生活を送りたいとする「経済」の4つの特徴を見出すことができる。

表10-1 尺度得点の比較（各学部の1年生）

	全体 (157)	人社 (45)	看護 (48)	薬 (25)	経済 (39)
動機1：専門的知識や技術を学ぶ	4.40	4.13	4.94	4.72	3.85
動機2：一般的知識や技能を学ぶ	3.85	3.93	3.96	3.52	3.83
動機3：資格や免許を取得できる	3.61	1.98	4.83	4.48	3.45
動機4：就職に有利	3.77	3.32	4.09	3.88	3.82
動機5：自分自身をみつめ、理解することができそう	3.11	3.44	3.35	2.56	2.79
動機6：のんびり自由にすごしたい	3.20	3.29	2.77	2.88	3.80
動機7：サークルやクラブで活動できる	3.37	3.36	3.42	3.16	3.48
動機8：友だちをつくる	3.82	3.78	4.06	2.84	4.20
大学生生活1：人間関係	3.50	3.56	3.54	3.19	3.58
大学生生活2：成長	3.87	4.08	3.82	3.74	3.75
大学生生活3：挑戦	2.87	2.91	2.77	2.90	2.91
大学生生活4：楽勝	3.47	3.36	3.53	3.20	3.69
能力	4.15	4.28	4.18	3.93	4.13
アイデンティティ1：確立	2.59	2.62	2.59	2.61	2.53
アイデンティティ2：拡散	2.31	2.27	2.36	2.15	2.41

意欲低下1：大学意欲低下	1.95	1.97	1.83	2.25	1.88
意欲低下2：学業意欲低下	2.48	2.44	2.64	2.27	2.47
意欲低下3：授業意欲低下	1.77	1.79	1.71	1.61	1.90
職業レディネス	3.08	2.95	3.29	3.09	2.97
社会意識1：規範意識	2.85	2.90	2.81	2.86	2.84
社会意識2：身近な事象への関心	2.80	2.80	2.68	2.89	2.88
社会意識3：自分の感覚や実感の重視	3.93	3.92	3.94	3.99	3.88
成人度1：熟慮	.04	.10	-.03	.18	-.03
成人度2：冷静	-.02	-.13	.06	-.13	.06
成人度3：表面的成人	.13	.07	.16	.20	.12
成人度4：社会的成熟	-.27	-.24	-.40	-.03	-.29

表10-2 1要因分散分析の結果

	F値	df	p	多重比較
動機1：専門的知識や技術を学ぶ	13.638	3,153	<.001	看護>人社、経済； 薬>経済、人社
動機3：資格や免許を取得できる	71.585	3,154	<.001	看護>人社、経済； 薬>人社、経済； 経済>人社
動機4：就職に有利	4.074	3,151	<.01	看護>人社
動機5：自分自身をみつめ、理解することができそう	5.065	3,153	<.01	人社>薬、経済； 看護>薬
動機6：のんびり自由にすごしたい	6.621	3,154	<.001	経済>看護、薬
動機8：友だちをつくる	11.311	3,154	<.001	経済、看護、人社>薬
大学生生活2：成長	2.906	3,154	<.05	
大学生生活4：楽勝	3.193	3,154	<.05	経済>薬
意欲低下1：大学意欲低下	2.740	3,154	<.05	薬>看護
意欲低下2：学業意欲低下	2.912	3,152	<.05	薬>看護
職業レディネス	6.877	3,147	<.001	看護>人社、経済
成人度4：社会的成熟	3.143	3,152	<.05	薬>看護

## 5 学年間比較

学年による変化を検討する。学科と学年の人数のバランスが取れたグループが人間と看護の1年から3年までであったので、この6群で比較することにした。「人間」と「看護」の1年、2年、3年の平均値を表11-1に示した。被調査者の内訳は、1年69名（人間 21；看護 48）、2年124名（人間 48；看護 76）、3年68名（人間 38；看護 30）である。

調査時点で回顧して回答していると思われる大学進学動機、大学生生活に重要な条件については分析から除いた。2要因（学科・学年）分散分析を行った。表11-2には学科、学年の主効果および交互作用に有意な結果の見られたものだけを示した。

表11-1 尺度得点の比較 (学科×学年)

		全体 (261)	1年 (69)	2年 (124)	3年 (68)
能力	全体(261)	4.19	4.25	4.14	4.23
	人間(107)	4.29	4.40	4.30	4.22
	看護(154)	4.12	4.18	4.03	4.26
アイデンティティ1：確立	全体(261)	2.65	2.63	2.61	2.73
	人間(107)	2.63	2.72	2.58	2.64
	看護(154)	2.66	2.59	2.63	2.84
アイデンティティ2：基礎	全体(261)	2.35	2.30	2.35	2.40
	人間(107)	2.28	2.19	2.27	2.36
	看護(154)	2.40	2.36	2.40	2.46
意欲低下1：大学意欲低下	全体(261)	2.06	1.89	2.13	2.10
	人間(107)	2.12	2.03	2.08	2.22
	看護(154)	2.01	1.83	2.15	1.95
意欲低下2：学業意欲低下	全体(261)	2.53	2.52	2.60	2.40
	人間(107)	2.35	2.25	2.43	2.31
	看護(154)	2.65	2.64	2.72	2.51
意欲低下3：授業意欲低下	全体(261)	1.84	1.70	1.91	1.86
	人間(107)	1.93	1.68	2.04	1.92
	看護(154)	1.79	1.71	1.84	1.78
職業レディネス	全体(261)	3.14	3.21	3.10	3.16
	人間(107)	2.98	3.04	2.96	2.99
	看護(154)	3.25	3.29	3.18	3.37
社会意識1：規範意識	全体(261)	2.94	2.85	2.99	2.94
	人間(107)	2.95	2.92	2.98	2.94
	看護(154)	2.93	2.81	3.00	2.94
社会意識2：身近な事象への関心	全体(261)	2.74	2.70	2.78	2.73
	人間(107)	2.80	2.74	2.82	2.81
	看護(154)	2.70	2.68	2.75	2.63
社会意識3：自分の感覚や実感の重視	全体(261)	3.96	3.95	3.97	3.96
	人間(107)	3.99	3.97	4.00	3.98
	看護(154)	3.95	3.94	3.96	3.93
成人度1：熟慮	全体(261)	.08	.07	.09	.08
	人間(107)	.18	.30	.17	.12
	看護(154)	.02	-.03	.04	.03
成人度2：表面的成人	全体(261)	.03	.05	.02	.03
	人間(107)	-.02	.04	.00	-.07
	看護(154)	.07	.06	.04	.14
成人度3：冷静さ	全体(261)	.16	.17	.13	.21
	人間(107)	.19	.19	.22	.14
	看護(154)	.14	.16	.07	.29
成人度4：社会的成熟	全体(261)	.36	.30	.41	.33
	人間(107)	.29	.09	.38	.30
	看護(154)	.41	.40	.43	.38

表11-2 2要因分散分析の結果

	主効果		交互作用
	学科	学年	
能力	3.907*	1.106	1.725
アイデンティティ2：拡散	4.104*	1.220	.052
意欲低下2：学業意欲低下	17.622***	2.550	.503
意欲低下3：授業意欲低下	1.707	3.236*	.780
職業レディネス	32.470***	2.354	.956
成人度1：熟慮	6.801**	.193	.997
成人度4：社会的成熟	5.102*	2.259	1.532

(注) 表中の数字はF値である。自由度は学科 (1, 251)、学年、交互作用 (2, 251) である。

交互作用の見られた尺度はなく、学年の主効果も「授業意欲低下」だけであった。授業意欲低下はほかの意欲低下尺度に比べれば平均値は低い、3学年の間では、表11-1から明らかのように、1年より2年、3年で授業意欲低下が高くなっていた。

学科の主効果は表11-2に示された6尺度において見られた。表11-1の数値を検討してみると、「能力」「熟慮」「社会的成熟」では「人間」のほうが「看護」よりも高い。一方、アイデンティティ「基礎」「学業意欲低下」「職業レディネス」では「看護」のほうが高い。つまり、学年を問わず、「人間」のほうにこれらの尺度でいう大人の状態を示しており、「看護」のほうに職業レディネスは高いが意欲に問題があることを示唆している。

#### IV 考察

大学には文科系と理科系が存在すると言われるが、大学進学動機などから推測すれば、今回の調査対象者は、文科系、理科系よりも資格免許が取得できるかどうかが進学動機に大きく影響していることがわかった。すなわち、大学生生活の忙しさを自覚している薬学系、資格取得で忙しい看護系、自分について考える時間のほしい人文経済系である。これらの学生の時間の過ごし方は大きく異なっている。

本研究では、大学生生活の入口、過程、出口、そして学生生活全体に関わる部分という4つの視点から大学生の意識について検討を加えた。

大学生生活の入口での進学動機については専門分野による違いが明確である。特に「看護」と「人間」「人文」との違いは明確であった。また1年生について学部間で比較した結果からも「薬」「看護」と「人社」「経済」の傾向の違いが顕著であった。これらの違いは当然といえば当然であるが、この多様な学生たちにどのような内容の大学教育特に教養教育を行なっていくのかは今後の興味ある課題となろう。

大学生生活の重要な条件については、「人間関係」と「成長」や「挑戦」の機会については学部間の差は顕著ではなかった。しかし、「楽勝」については1年生の結果から「経済」がほかの3

学部とは異なっていた。経済の学生の動向は講義中からも気になる場所であったが、求めるものが違えば行動も違ってくるので、個々の学生の動きを見ながらの指導が必要になると思われる。

アイデンティティ尺度や社会意識尺度についての学部間比較はそれほど明確ではなく、現代青年の状況としてみても特徴的なことは見出せなかった。一方、アイデンティティ「確立」と私生活意識の2側面との関連は明確であったが、アイデンティティ「基礎」と「実感重視」との間に相関が見られなかった点については今後の検討が必要であろう。

ところで、本研究では特定の2大学の一部の大学生を対象として質問紙調査を行なっている。大学の目的の多様性、学生の気質の違い、学年による違い、とくに学年の進行に伴う発達的变化を検討するためにはさらに計画的に対象を広げてデータを収集する必要がある。また、本研究では大学生生活に重要な条件を職業に求める条件を参考にして作成したが、大学生生活のアメニティに関する条件を視野に入れて考えれば、さらに項目内容を工夫する必要があるだろう。

大学を取り巻く状況が大きく変化している時代に学生のニーズや心理的発達状況、価値観など関係付けながら、大学と学生のあり方を総合的に考える必要があると思われる。

#### 参考文献

- 後藤宗理・大野木裕明（編） 2003 フリーター：その心理社会的意味 現代のエスプリ、427 至文堂
- 久世敏雄・宮沢秀次・二宮克美・和田 実・後藤宗理・浅野敬子・宗方比佐子・大野 久・内山伊知郎・鄭 暁斉 1987 現代青年の社会意識に関する研究 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）、34、25-39
- 久世敏雄・後藤宗理・浅野敬子・宮沢秀次・二宮克美・大野 久・宗方比佐子・内山伊知郎・和田 実・鄭 暁斉 1987 大学生の社会的態度と社会意識 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）、34、41-53
- 立命館大学教育科学研究所 1997 文化的実践としての学生の「学ぶ活動」に関する認知科学的研究（立命館教育科学プロジェクト研究シリーズⅧ）
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で— 教育心理学研究、40、121-129
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究、43、145-155
- 津留 宏 1968 成人度の発達とその規定因 依田 新（編）「現代青年の人格形成」金子書房 pp.86-118
- 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子 1983 職業レディネスと職業選択の構造—保育系、看護系、人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）、30、63-98

#### 謝辞

本研究の元になったのは2003年度教養教育の担当クラス「心理学1：こころの理解」で教材として収集した質問紙調査のデータである。このクラスとの比較をするために看護学部小笠原昭彦教授、堀内久美子教授のご協力を得て看護学部で調査を実施することができた。調査の実施をお認めいただいた看護学部倫理委員会（委員長：堀内久美子教授）に感謝いたします。